

HELLO PSJ

短・長期留学体験記@アメリカ合衆国 ―現在進行中―

カリフォルニア大学デイビス校 関澤 信一

袖振り合うも多生の縁と申しますが、先のIUPSのポスター発表で関野祐子先生と隣り合った事がご縁で、HPSJに寄稿させて頂く事になりました。実際には、袖と言うより私のポスターがはみ出してしまったために、ポスターが触れ合ったのですが、さて、私は2001年より現在に至るまで、カリフォルニア大学デイビス校で研究生活を送っております。自分の興味に沿った研究が続けられているという点では幸運であるものの、成功している研究者とは必ずしも言えず、これから留学を考えていらっしゃる人には、反面教師的に読んで頂ければと思います。

最初のアメリカ留学(短期)：テキサス大学ガルベ斯顿校

アメリカ合衆国での研究生活は、実は今回で2回目になり、初めは、1996年から2年間、テキサス大学ガルベ斯顿校で過ごしました。大学院のテーマが、呼吸循環器系における感覚受容機構であり、呼吸循環器系の神経制御、末梢から中枢神経系への情報伝達、反射を介しての出力、そして病態時におけるメカニズムの変調について興味を持っていたため、大学院指導教官の薦めもあり、学位取得後はテキサスへの留学を決めました。インターネットがそれほど普及していない時代、色々な情報が乏しいまま渡米したわけですが、まず始めに生活の立ち上げに苦勞したことは言うまでもありません。最初に必要な、銀行口座、電話、アパート(住所)、そして社会保障番号、それぞれがそれぞれ別の情報を必要とするので、正にCatch-22という表現が適切な状況で、インター

ネット、携帯電話の普及した現在では考えられないことでしょう。テキサスで1年半ほど過ぎた頃、ボスがNIHのグラントを更新をしないでリタイアする、と言い出しました。これにより、否応なくテキサスから撤退することになるわけですが、やはり若手・中堅のボスが運営するラボの方が腰を落ち着けて研究を出来るのではないかと感じました。2年間という期間は、すでに稼働しているプロジェクトに組み込まれて働く場合には、十分な時間であると思いますが、自分なりにプロジェクトを立ち上げて、更に論文を投稿できるまで仕上げるには、少々時間が短いかもしれません。当時は郵送による論文投稿でしたが、幸運なことに2ヶ月で受理されたため、最低限の仕事はしてテキサスを離れることが出来たと、思っております。

ところで、テキサス滞在2年目にサンフランシスコでアメリカ胸腔学会が開催され、これに参加したのですが、その際、レンタカーでスピード違反をしてしまいました。一応、名誉のため、その後は心を入れ替えて、現在まで無事故・無違反です。違反チケットは、テキサスの住所に郵送されてきたわけですが、周りの人間達は、「そんなの払わなくていい、他州なんだから」と言います。確かに、FBIが乗り出すような大きな犯罪ではないし、車の保険ですら他州の違反はカウントしない(違反すると車の保険料が値上がります)のですから、そう言うのもわかるような気がします。とは言うものの、違反金は滞りなく払っていたので、2001年からのアメリカ再入国、カリフォルニア滞在には何の支障もなかったわけです。違反金を払っていなかったら、二度目の留学はなかったか



写真1 クリスマスパティーでのひと時。2008年12月当時のラブメンバー。左からChao-Yin, Ann (Boss), 筆者, Andrea, Paul, Rick, Eriko。

もしれません。

2度目のアメリカ留学(長期・継続中):カリフォルニア大学デイビス校

カリフォルニア大学デイビス校では, Ann Bonham 教授の下, 末梢呼吸循環器からの情報が入力する延髄弧束核の神経・シナプスの特性, 並びにその可塑性に関して, 屋内・屋外空気汚染からの影響とその関連病態に関する研究を, 電気生理学・免疫組織学的手法などを用いて遂行しております。Bonham 教授との出会いは, 先のサンフランシスコでの学会で, たまたま一言二言話しただけなのですが, その時の印象の良さから, まず, 私の大学時代の後輩に留学先の候補として薦めたのです。その後輩は, 1998年から2年間ポスドクをして, 日本に帰国。今度は, 私自身が行くことになったという縁があります。

さて, アメリカの各大学・学部には, 人材面からくる研究分野の特色と同時に施設による特色があり, ここデイビス校では全米でも希少な霊長類の研究所がその1つになります。その特色を生かし, 私の研究もラット・モルモットからアカゲザルまで, 幅広い動物種を扱うことができます。ただし, サルの場合, その70%以上がヘルペスBウイルスのキャリアーで, 人に感染した場合の致死率が高いことなどから, 生体を使った実験では

注意を要し, 大変なストレスになります。斯く言う私も, 実験中に素手で延髄スライス標本に触れてしまい, 慌てたこともありました。人材面から来る特色という点では, department内のそれぞれのラボは, 独自のテーマを持ちながらも, ある共通の繋がりを持っていることが多いので, コラボレーションすることにより, それぞれの研究がより大きく広がっていく可能性を期待できます。また, 所属のラボが持っていない設備機器を利用したり, 技術を習ったりすることも比較的スムーズに事が運びます。私自身も, つい最近, 電顕を用いた実験でこのような経験をしています。さて, Bonham 教授は, 私がラボに入ってから以来昇進を重ね, まず, Department of Pharmacologyのchair, ついでSchool of MedicineのExecutive Associate Deanになりました。ここまでは, 同じ轍を踏まなかったと言えるかもしれませんが, 7月からその職を辞め, ワシントンDCにある, 米医科大学協会のChief Scientific Officerという役職についてしまい, ラボは来年夏に消滅することになってしまいました。Permanent residency (=green card)を申請中の私としては, (アメリカ国内でラボや大学を)移動することもままならない状況です。(私を雇用してみようなどと, 少しでも興味を持った方がいらっしゃれば, 是非声を掛けてください!)

ところで, 現在の私のポジションはProject Scientistというものなのですが, ラボに入室した頃はPostdoctoral Fellowでした。いわゆるポスドクですが, この名称には裏があります。事細かに規定があり, 私の場合, 健康保険は大学がカバーするが, 眼科・歯科はカバーしない, というものでした。給与以外にベネフィットの規定も事細かにあるのか, とビックリしたものの, やはり, 健康保険の高額さには驚きを隠せません。かと言って, (日本)より良い医療サービスが提供されているか?と言うと疑問であり, 医療保険制度を含むシステムの改革が必要なのは明らかです。話は戻って, 「Project Scientistにタイトルを変えましょう!」, とボスに言われた時, 実は, 日本のあるポジションに応募しようと考えており, そのことをボ

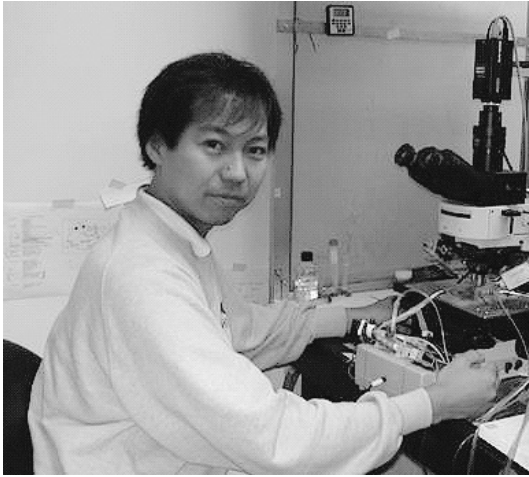


写真2 本人・パッチクランプセットアップの前で

スに正直に話したのです。結果は、日本のポジションは不採用で、正直に話したことが影響したかどうかはわかりませんが、実際に私のタイトルが変わったのは数年後になってしまいました。

最後に

デイビスまたはカリフォルニアの情報（宣伝）を。デイビスは、サンフランシスコよりカリフォルニア州都のサクラメントへ向かう途中にあり、ナバ・ソノマのワインカントリーに近く、レイクタホ、ヨセミテまでも日帰り可能な場所に位置しております。私は、通勤に自転車を使用していますが、夜中でも女性がジョギングをしているほど、治安の良い町です。主な犯罪は、自転車の盗難です。また、日本を含むアジアの文化がかなり流入していることや、英語を母国語としていない人（州知事も）が多いためか、外国人英語が比較的通じやすいことなど、いい面も多くあります。短期の留学には、とてもお勧めですが、長期的には少々難点が、カリフォルニアは物価（地価）が高いため、合衆国中央部などと比べると、生活費が少々嵩みます。

つらつらと書き連ねてみましたが、少しでもお役に立つような情報、共感を覚えるような一節、または、アメリカの空気を感じて頂ければ、私にとってうれしいかぎりです。（問い合わせ先：sse.kizaw@hotmail.com）